

II
—
11

總括討論

— 日本研究の国際化 —

(議長 梅原猛)

報告 芳賀徹

今回のシンポジウムの全体は「世界の中の日本」ということですが、それにつきまして非常に大事なヒントを与えてくれましたのは、レヴィ・ストロース氏の講演の初めのほうにあった言葉であります。それは、自分は文化人類学者として、日本学専門ではないのに、なぜ日本を論じるかということに触れた一節であります。

「一つの文化を内側から見るとは、その文化の中に生まれた人にはできない特権です。しかし、人類学は、その文化の中に生まれた人に対しても、全体的展望を提示するくらいのことならできます。それは略図を描いた程度の単純なものですが、中にいる人には近すぎて見えない場合もあるのです。」

これは、非常に謙虚な言葉でいっておりますが、しかし、広い視野からある地域を見るということを考える場合に非常に大事な基本的な態度を述べた言葉だと思えます。

確かに我々の日本文化というものにはどこかに、日本文化の中に生まれ育った人でなければ結局わからないものがあるかもしれない。しかし、同じものがその中にいる人には近すぎて見えないというケースもある。これはどこかでフランスの詩人がいっていたことですが、自分の文化というのはちょうど自分の体みたいなもので、我々は自分の体にぬくぬくと

して住みついている。そして、自分の鼻がどうしてこんなふうになっているのか、手の指はなぜこんなふうになっているのか、なんら説明がつけられない。それと同じような感じで、我々は自分の文化の中に住みついているわけです。それを何ごととも思わずに生きているわけです。しかし、だからこそのわかるというところもある。しかし、だからこそのわからないというところがむしろ大きいのではないかと思うのです。

フランスの哲人のアランもどこかでいっていたことですが、目の健康のためには遠くを見ることが大事である。遠くから見ないと物事の仕組み、それが持っている意味関係は把握できないということを非常にきれいな言葉でいっていたことがあります。「遠くを見よ。遠くから見よ。遠くを見ること、遠くから見ることは第一に目の衛生にいいし、精神衛生にもいいのだ」ということをいっておりました。

この国際日本文化研究センターが行う国際的な、そして学際的な視野からする日本研究というのは、まさにそのアランがいい、あるいはレヴィ・ストロースが持っている「はるかまなざし」を絶えず活用させることである。そして、それによって日本を見る。日本を見ることによってまた世界を見直す。そういうことだろうと思うのです。そのためには、今回ここにお集まりのような外国人の研究者たちと絶えず接触し、交流し、共同研究をする。それが最も有効な手段である

ということとは、この三日間のセミナーの経験を通しても自覚することができたし、確認することができたように思います。

遠くから見る。そして、一種のクリティカル・ディスタンスといえますか、批評の距離を保つことが我々日本人の日本研究者にとっても不可欠のことであり、それがなければロゴスの眠り、あるいはレヴィ・ストロースのいう「ロゴスの頽廢」に陥ってしまう。ロゴスが活発に生きている時は批評の距離を保つことができる。それが世阿弥のいう「離見の見」でもあるだろうと思います。外国人として日本研究をなさる方たちもそれを發揮するのであるうと思います。外国人として生まれた特権ですね。外国人として生まれながら、日本研究をやる。外国人であることの特権を最後まで生かしていただきたい。外国人であることを放棄して、日本の国文学者、国史学者と同じような日本文学や日本社会の研究をやるのでは、外国人研究者である意味がほとんどなくなるのではないかとさえ思うわけです。

批評の距離とか、遠くから見ることに、それが自分の国を知る上にも、自分自身を知る上にもいかに大事かということだと思います一つのエピソードは、二十年あまり前の一九六〇年代のことですが、アメリカのいわゆるジャパニーズ・スタディーズになった日本研究のそのころのリーダーはエドウィン・ライシャワーでありましたが、そのライシャワーグル

ープが日本近代化研究を一挙に非常にインテンシブに進めたことがありました。これは、それまでまことにゆがんだ、間違った、遅れた、みじめな、病気の近代化であるといわれていた明治維新あるいは明治以前の徳川時代について、はるか広い視野から、近代化という大きな比較のフレームワークの中でもう一回見直すことによって、明治維新の過程、それに先行した徳川時代に対する評価を逆転させたといってもいいような、画期的な研究成果であったと思います。

ところが、ライシャワーグループが近代化研究を進め始めた時に、その衝撃波がたちまち日本の学会にも広がってきまして、マスコミのセンセーショナルリズムにもあおられて、それがいわゆるライシャワー路線として受け取られたわけであります。ライシャワー自身にはそんなにポリテイカルなインテンションはなかったのだろうと思います。いくらかはそういうニュアンスを帯びざるを得なかったらうと思いますが、しかし、日本の国内でいわれたほどの政治化された意味合いはなかったらうと思います。それを日本国内のマスコミと学会が非常にポリテイサイズしまして、あれは要するに、日本を礼讃し、それをモデルにして東南アジア諸国、発展途上国の近代化を進めるといって一種の日本の文化帝国主義を推し進めようとするアメリカの陰謀であるというふうな受け取り方をしたわけであります。

そういう受け取り方がマスコミだけならわかるのですか、日本の歴史学会の中でも非常に強かったのであります。自分たちだけが専門であると思っっている日本史の分野に、なんと夷狄のアメリカ人が、近代化研究というようなことを振りかざしてズカズカと乗り込んできて、それまで信じていたカテゴリー、イデオムを全部ひっくり返そうとした。まるで一八五三年にペリーに真向かった幕府の役人たちのようなものだったと思います。あのころ長崎奉行をしていたあるひとりの侍は「黒船を見ると目が痛い」といったと、ゴンチャロフの『日本渡航記』に出てきますが、あのころの日本の日本近代史学者たちは、ライシヤワー路線の攻撃に対して、目に痛い、ああいうものはチカチカしてまともに見られない、なにか恐ろしくてまともに見られない、そういう感じでしたよな気がします。まるで闖入者を見るような、そういう目で見ておりました。

非常に狭隘なナシヨナリズム的な反応でもって、日本を再評価し、礼讃とまではいわなくても、いままでのあまりにゆがめられた映像を正そうとしたアメリカの歴史学の運動、日本を認めてやろうとする動きに対して、奇異なことに、日本のナシヨナリストたちは反発したわけでありました。これが二流、三流の学者だけならいいけれども、あのころは一流の学者までがそういうったわけです。

私はショッキングでいまだに忘れられないのは、朝日新聞だったか、日本古代史の中では本当に優れた学者である井上光貞先生がこの問題に触れて書いておられます。その中で、アメリカの学者たちの近代化研究は痛い所に手が届いていない、まことに大まかな外からの把握にすぎない、近代化の過程で日本人が経験してきた痛みは外部の者にはついに理解できないのだということをおっしゃったのです。井上先生ともあろう人がそういうことはいわないだろうと思っていたのにいわれたので、私は非常にがっかりしたというか、目の前が暗くなった。おおげさにいえばそんな感じもしたわけがあります。

いくらかは井上さんのいうようなことだってあり得ます。しかし、それは日本側から、こういうこともあるんだぞといって学問的に提出すべきものであって、当事者の痛みがわからないからあれは価値がないというような評価の仕方は、非常に閉鎖的、鎖國的な反応であったと思います。井上先生は亡くなってしまわれましたが、井上先生のグローリーにちょっと翳りをつけてしまったのではないかと思っうわけでありました。

日本側のマスコミに、学会に、井上光貞先生にまでそういう反応が出てきたことに対してアメリカの学会はどうしたかといいますと、アメリカの学会はそれにすぐに応じたわけ

す。アメリカの学会はそれまでに“Studies of Modern Japan”として五冊出しており、その五冊に引き続いて“Dilemmas of Modernization”という本をつくってしまったのです。それはアメリカの学会が健康でいきいきとしていて、ダイナミズムを失わないでいた証拠だろうと思います。日本側からそういう反応が出てきた、じゃあ、我々もその問題を我々なりの立場から考えてみようとしたわけです。そういうやり取りが国際的な日本研究には必要だろうと思います。日本側の閉鎖的な、排他的な反応は非常に醜いものであったとさえ、私はいま思い返しても思います。

しかし、日本側もそれ以後、このライシャワー路線の近代化研究に一步譲った形で動いていかざるを得ませんでした。そこに大学紛争というものが重なったこともありまして、それまでの、ことに日本近代史研究におけるマルクス主義的な一方的な、西洋だけを模範として、それによって日本に審判を下すというような立場からの近代日本暗黒史観というものは、潮が引くように退潮していきました。まだそういう人たちはいるようですが、本当に狭い所へはいつてしまっているようでありまして。日本側も、そのインパクトを受けて、それなりの変化を遂げたということはできませんが、それはいやいやながらの変化であったというような気がします。しかし、結局変化が生じて、その結果、後には日本の近世とか近代の

歴史が広々と開けた。新しい問題が山積する新しい分野として改めて見えてきたという面白い結果になりました。それで、最近では徳川の研究とか、明治の再検討というようなことが非常に興味深くなってきているのだらうと思います。

ついでにいきますと、そのころは、日本では日本史とか先日から悪者になっている国文学だけが閉鎖的だったわけではなく、学会全体が閉鎖的で、さっきシャモニさんがおっしゃったことですが、外国で出た日本研究が日本の学会のレビューの中に登場しない。いまだにそういう傾向は続いているわけですが、あのころはもっとひどいものでした。外国人が英語やドイツ語、韓国語で書いた研究、それは日本の学者はなかなか読めないということはあるかもしれませんが、せめて翻訳が出た本ぐらいいは、『回顧と展望』という史学雑誌が毎年五月号かなにかにそういうので分厚い一冊を出しますが、ああいふものの中に取り上げてほしいだらうと思うのですが。

一九六〇年代の前半でしたが、ジョージ・サンソンの“The Western World and Japan”、あれを我々が訳したわけですが、上下二冊で筑摩叢書で出た。そんなものは一切メンションもされない。リストにも載らない。それから、前々日でしたか、私がちょっと挙げましたジャパニーズ・スタディーズの一つのマスターピースではないかといったマリリス・ジャンソンの“Sakamoto Ryoma and The Meiji Restoration”

あれぐらいなら読めるはずですが、全然メンションもされない。訳が出てからも出てこない。そういう状態が一九六〇年代に続いたわけでありませう。

開放はされてきたけれど、いまだに一種の鎖国主義といえますか、ノンタリフ・バリアといえますか、目に見えざる障壁が日本の学会自体の中に残っている。国際的な日本研究のもたらすべき一つの意味深い結果は、そういう日本学会の中の見えざる障壁を破っていくことだろうと思います。日本研究の国際化というのはこのセッションのテーマですが、これは、先ほどから申しているようなことで、日本をまともには知り、日本というものの正体を我々自身が知るためにも必要であり、日本を知ることによって、世界の知識といえますか、いま国際的相互依存が進んできているこの世界の中にあつて日本を説明する上にも、非常に重要なことはいうまでもないだろうと思います。大学の場合は研究だけではなく、教育が伴うわけで、そのために障壁が高いということがあるのかもしれない。こちらの方面でも、少しずつでも開いていく努力が必要なんだろうと思います。日本研究をよりよく国際化させていくには、大まかにいって三つの方向が考えられるのではないかと思います。

一つは、一種の比較史といえますか、日本と他国文化、異文化との相互の接触とか、受容とか、影響とか、そういう関

係を歴史的に把握していく。あるいは歴史的な観点から文学でも、美術でも、宗教でも、人間の移動についてでも研究していくこと。これはそれ自体が日本を国際的な場に引き出して研究することになるのであつて、その最も基本的なフェイズかもしれない。村井さんのおっしゃるラッキョウの皮むきが同時に進められていく。その最後にラッキョウの、あるいはタマネギの芯を見つけようとするかしないか。それはしなくてもいいのです。こういう関係史それ自体が非常に興味深い。日本側がどんな反応を示したか。日本側が示した反応に対してアメリカ側はどう反応したか。これは、キーンさんの初日の、明治前後からの日本における西洋文学の接し方、また日本にきたイギリス人たちの日本研究の話の中にも出てきたわけですが、ああいうところで起きるさまざまな反応、ラブ・ヘイト・レイションシップといえますか、愛憎併立の立場からする日本研究、それから日本人側からの西洋研究、それ自体が研究者にとって十分普遍的な意味を持ち得るものだろうと思います。これは、韓国が西洋を見た時にどうか、中国の西洋への対応はどうであつたか、タイが西洋の文学を入れようとする時にどうなつたか、インドではどうか、アメリカが日本の文学を入れたのと中国の文学を入れたのとはどう違うか、そういういろいろなあるわけで、そういうことを重ねていくことによって、それぞれの文学でも文化でも

その正体がおのずと浮かび上がってくる。また、文化の移動それ自体がこれから世界の国際化とともに一層頻繁になり、深くなっていくわけで、その場合に一つの示唆を与えることもできるのだらうと思います。日本研究の国際化というところで大事な、基本的な分野であるのだらうと思います。

ラッキョウの皮むき、タマネギの皮むきをしていって、最後に、レヴィ・ストロースのように、エスプリ・ジュウモン（縄文精神）というようなものを見つけたり、あるいはステイル・ジョウモン、それがいまだにサバイブしていると。そういうところに行くかどうか。レヴィ・ストロース氏はそうもっていったわけですが、そう行かなくてもいいかもしれない。

また、こういう比較考証研究をやることによって、レヴィ・ストロース氏のいわゆる「グランミット・プリミット」あるいは「ウグ・ミット」とレヴィ・ストロース氏がいました、日本の神話が偉大な、完成した、エラボレイトされた神話の体系を持っているというようなことも、こういう考証と対比の研究を重ねることによって浮かび上がってくることなんでしょうと思います。

第二番目として、そういう歴史的な考証とか交流、接触、受容、影響というような研究を踏まえた上で、日本文化と他国文化の比較研究が成り立っていくのだらうと思います。ス

リチャイさんがいわれたように、また吉田光邦先生の発言にもありましたように、日本とタイにおける近代化の比較研究は、アジアにおいては近代化の比較研究はまだ十分意味を持ち得ると思います。それはなにも、日本がこういうふうになって功したからそれと比べてということではなくて、近代化というのはどういうパターンで起きるかということのより精密な把握のためにも、非常に重要な問題だらうと思います。タイの十九世紀の歴史を研究することによって、日本の十九世紀の歴史の動きのいわれが一層明らかになってくる。そういうことが非常にありそうな気がします。

それから日本と中国。これは高さん、中西さんのレポートで触れられ、山田慶児さんのコメントの中にも出てきました。が、いうまでもなく長い時代にわたるぶ厚い、深い接触の歴史の上で、日本と中国の、家族の問題でも、儒教の変形の問題でもいろいろなことができるわけでありませう。それから、李御寧さんがなさった日本と韓国間のレトリックの比較ですね。李さんはこれを韓国だけに限らずもつと広げてやろうとしたわけですが、要するに、アーギュメントの仕方の比較研究とかそういうことも、レトリックならレトリックというディシプリンを踏まえた上で、実証的に可能なことだと思います。

タイラーさんが『春日権現験記』を専門家として研究した。

タイラーさんの背後にはキリストの世界における聖地の意味との比較ということが、露骨ではないけれども、どこかにちやんとある。コンクの修道院を建てた聖エボレでしたか、そういうものが背後にあるから、タイラーさんの『春日権現験記』の研究はいきいきとしていて、我々日本人も、非常にあざやかに、なるほどあいうおもしろい問題があるのかと自覚することができたのだと思います。こうやって見ると、おもしろい、これから大いにふくらみそうなパン種が今回のセミナーでずいぶん拾えたと思います。

三つ目の方向として考えられるのは、いうまでもなく、きのう、そしてきよの午前中にもしきりに話題になりました。普遍的な批評基準、クライテリア、あるいは概念というものをもってきて、それによる日本文化、日本という地域の特徴の分析、解釈、批評であります。梅原さんもいつかいつておられた普遍学としての日本学というのは、日本を世界に広めるんだというようなのは非常に誤解されやすいことだったのですか、そんな八紘一字ではまったくなくて、普遍の場に引き出して日本を見直すということ、普通のデイシプリンあるいはクライテリア——デイシプリンよりはもっと狭い意味の「批評基準」——に基づいて文化を見直すということです。レヴィ・ストロース氏は日本文化の特徴として美術品などにも触れたあげくに、カルテシニアシズム・エステティック

(美的デカルト主義) というようなことをいいましたが、そんなことは本当に成り立つのかどうか。これは彼からの一つの問題提起として興味深いことだろうと思います。フランスというのはロゴスのカルテシニアシズム・エステティックであったけれども、日本は美において物事をデイビジェシ、そしてジェスタフォゼする。細かく分けていって、しかも並立して、そして『保元物語』『平治物語』とかああいうものを書いたり、大和絵をかいいたりする。そういうところに一種のデカルト風の、物事が困難な時はその困難を分解せよ、そしてそれを一つ一つ解いていけという、ちょうどあれに当たるのではないかというようなことをいいましたけれども、そういうことは本当に普遍性を持つのかどうか。

中西さんが出された、文化としての自然あるいは文化化された自然の文化の中における働きというような問題。これも批評基準というよりは普遍的な主題として非常にいい大テーマだろうと思います。文化と自然の関係、叙情の中のロゴスとか、合理を含む非合理とか、こういう問題はなにも日本のユニークさ、特色だというのではなく、日本だけではなく、あるいはアラブの世界にもそういうものはあるかもしれない。韓国にはなさそうだなとかね。韓国は非合理を合理で包むのかもしれない。まあ、そういうことはいろいろ考えられる。デイシプリンというやはりちよつとこだわるところがあ

りまして、東京帝国大学法学部何学科、文学部国史学科、仏文学科、社会学科というああいものがすぐ浮かんできまして、あんまり好きじゃないんです。あの古臭くて、薄暗い研究室。教授の名札がばかであつかつかかかっているようなああいうのが浮かんできて、非常に嫌いなんです。そうじゃなくて、デイシプリンさえ離れたデイシプリン、ネオデイシプリン、ニューデイシプリンを日本研究の一つの場として打ち立てていくこともできるのであって、いまの文化としての自然の問題なんていうのは、そういうものになるのかもしれない。

そういうところに日本文化を引き出して分析してみる。昨日議論されました、タマネギ風にでき上がっている文化相互のその組成の比較、これも普遍学として非常に興味深いのではないかと思います。フランス文化なんて相当のタマネギでありますし、アメリカも巨大なタマネギに違いない。韓国だってやはりタマネギだろうと思うし、中国がちよっと難しい、あれはタマネギではないかもしれません。そのタマネギがどういふふうに皮が重なり合っているか、中の芯がどれくらいまで表に浸透するかとか、それはいろいろ度合いが違うだろうと思うのです。そういうものも自由な観点から見た普遍学としての日本学となり得るのではないかと思います。

このような普遍的クライテリアをつくる努力をしてこなかった、ひと昔前の日本における日本研究は相当の間違いを犯

してしまった。イギリスやフランスの市民革命をほとんど動かぬ理想的な、普遍的な型としてとらえ、それとの対比で明治維新をとらえようとした。あの型に比べると明治維新は非常に違っている。だから明治維新はゆがんでいる、間違っているというようなことだったわけですね。いま考ええると実に不思議なメンタリティーにとらわれていたものだと思うのです。日本に合わないのなら、法則のほうを変えればいいのに、そうしないで、日本の歴史が間違っているというふうないい方をしたわけです。我々が学生のころは、朝から晩まで、お正月から十二月までそういう話を聞かされていたわけです。まことに恨みつらみに思っているわけで、こうところにそれが強く出てきますが。

同じように、日本近代文学における自我の確立とか挫折というような問題、あれも中村光夫風というか、モーパッサンかフローベルかなんかを絶対基準とした、要するに西欧的自己が日本でも北村透谷あたりで成立しようとして、挫折してしまつたというような格好のいい、形成と限界というああいふ問題の立て方ですね。あのころに出た研究は何にでも「何とかと限界」というのがついていました。「北村透谷その意味と限界」と必ず「限界」がついていた。「挫折してしまつた。それは日本の近代化の闇の中に飲み込まれたのだ」というようなまかつたく決まつたパターンが、十五年ぐらい日本の学会

を支配していたのです。

それは、クライテリアというようなものをこちらの事実に合わせて訂正しようという志も頭もなかったわけです。普遍的と考えられているクライテリアを絶えずリバイズする。これは、実際に、きょうはあまり話題にならなかったフランスにおける日本研究の中で、例えば、ジャクリヌ・ピジョーがパリのセットで教えておりますが、彼女は非常に自覚しております。彼女はいま芸批評、文学理論の最先端のいろんなターム、理論を使って日本の中世の道行き文学を研究しています。そうすると、どうしてもいまの文学理論の諸概念を変形させざるを得なくなる。それを期待して、だからこそ日本文学を研究する意味があるということなんです。これはキーンさんなんかもよくいわれていたことですが、日本という恐らく西洋の世界から伝統的に一番離れていた世界の文学を持ち出すことによって、かえっていま西洋で流行の文学理論の足りなさといえますか、それが決して普遍ではないということを見て、修正を加えていく。そういう作業が大事なんだろうと思います。

日本研究というものは、フィロロジを中心とした伝統的なジャパノロジ、あるいはディシプリンに基づいたジャパニーズ・スタディーズ、ネウストプニーさんのいうポストモダン的な日本研究などいろいろあり得るわけで、シャモニさ

んのいうように、結局どれでもいいとか、ポストモダンは元のジャパノロジに戻るところもある。要するに正反合の弁証法も働き得るということ。どういう観点からでもいいわけですが、しかし、外国人の研究者としては、日本の学会の中の問題の立て方とか、日本の学会で流通している方法とか、そういうものに埋没しない批評の距離、ディスタンス・クリティックを保持してくだること、これがぜひ願いたいところだと思えます。外国人研究者であるからといって、そのまま国際的な日本研究者とはいえないわけですね。インターナショナルであって、日本と自分のカルチュラル・アイデンティティーとの間にインターの関係を保つことが必要なんだろうと思います。

これは日本側における外国研究についても十分いわれることで、これが足りなかったわけです。日本における英文学とか、独文学とか、仏文学研究では、すぐに、いまフランスの学会の何という本が出たといつて、それにピタッとくっついて、そのオウム返しをする。研究の主題までフランスの学会の流行の中で選ぶ。自分の好みによってアンリ・ドレニエを選んで研究するなんて人はもういないわけです。そういうところに、だれかの話に出てきたロゴスの眠りといいますが、ロゴスの頹廃が生じてくる。

自分自身と自分の研究対象との間の緊張関係は、矢野さん

が、政治学というのは緊張関係を持った学問である、対象との間にいつも緊張を保つ学問であるといわれましたが、国際的な日本研究には、日本側からするにせよ、外の国からするにせよ、必要なものだろうと思います。これは日本研究に限らず、学問というものはそういうものかもしれませんが。距離を保ち、緊張を保つことによってロゴスを絶えず目覚めさせ、感受性をいつも解放しておく。そして、想像力を抑えなくて、躍動させる。文化研究というのは、ロゴスだけではなくて、感受性とか想像力が加わらなければ生きた学問にはならない。だから、結局のところは、千メートルのレースならば〇〇メートルまではウマの手綱をしめて走ってもいい。もっぱらロゴスによっていってもいい。しかし、残りの二〇〇メートルはウマというイマジネーションの手綱をゆるめてやったほうがいい研究ができるのではないか。最後まで手綱をしめっぱなしの競馬はおもしろくないのではないかという気がします。あるいは一五〇メートルでもいい。人によっては三〇〇メートル。私などは六〇〇メートルぐらい手綱をゆるめっぱなしかもしれません。そういうのもあってもいいのではないかと思います。

ことに文化研究というのはどうしたって私観がはいるんで

す。それから、さっきいったように、自分が住みついている文化からのバイアス、これはどうしたって出てくる。それは抑えるだけ抑えたい。しかし最後には出るものである。最後にはそれを出したほうが……自分なりの価値判断を下すのは……。矢野さんのいう社会科学などと違って、人文科学がどうしてもいのはそこなんです。社会科学がつまらないのはそれをやらないからであって、あるいは、やらないような顔をするからであって、日本文化といわず文化研究の場合は、それが必要なだろうと思います。

それから、知的国際主義というようにものに立ってロゴスも感受性も想像力ものびやかに促す、働かせる。そうやっていくことによって、ダルとはおよそ反対の国際的な日本研究が行われるようになり、国際日本文化研究センターにもなり得るのだろうと考えるわけです。桑原さんが開会の辞でいわれましたが、相互の影響を通して自分も変わっていくことに臆するな、回避するな。さすが名先達の言だったと思えます。我々はあれを肝に銘ずる必要があると思います。要するにダルじゃない学問ですね。ダラーンとした眠っちゃった学問を去ろうということでありませう。

でも、いまアメリカの日本研究は非常に盛んですが、十五年ほど前に、アメリカの日本研究のリーダーである日本史をやっているジョン・ホールとある席で話をしていた時に、彼がふっと同じような感想をもらしていたのです。「Japanese studies are institutionalized in America but not yet assimilated to intellectual milieu」ニューヨークあたりで、ホストンで、あるいはサンフランシスコで、知識人が集まった時、お茶を飲んだり酒を飲んだりしている時に、なにげなく西鶴のことが話題になる。当たり前のこととして俳句のことが話に出る。あるいは日本の政治家のことが話題になるということはまだまだない。アメリカの三〇〇だか四〇〇の大学には日本研究学科、日本文学学科、日本語および文明学科、あるいはイースト・エイジャン・スタディーズができた。だからインステチューションとしては日本研究はすっかり定着した。しかし、まだ知的ミリユーの中に同化されていない。そういうことをあの当時のアメリカの日本研究のリーダーであったジョン・ホールがもたらしたことが非常に胸を打ちました。

でも、考えてみれば、そういう中で、それでも日本研究を続けるというヒロイズムもありますか。ヒロイズムが慰めてくれればと思いますけれども。

大石 私みたいにいままで内からだけ日本史を見てきた者にとつては、外から見るといって視覚は非常に役に立っているのですが、その結果、日本は違う違うというのは、それは大したことないんだというような結論に近づいてきたと思うのですが、私は昔から、日本とヨーロッパは本来文化構造としては同質じゃないかと、そのようなことを考えておりました。そうしますと、同質のところが集まって、やっぱり同じじゃないかと言いつても面白くない。

世界中同じであるかといいますと、私は、やはりそうでないところもある。そういう意味では、例えばアジア地域だとか、アフリカだとか、中南米だとか、そういう所とも比較してみることが必要だと思えます。

ネウストプニー 非常に有益な会議だったと思えます。その一つのテーマ

は日本研究のパラダイムというものだったのですが、この日本研究のパラダイムは、我々がどういうことをしているかということを理解するために必要な概念だと思いますが、それと同時に、これから私たちはパラダイムの概念だけにとらわれないということが非常に大事ではないかと思えます。特にパラダイムという概念を評価的な基準として使うことになりまして、これは危ないと思うのです。「ポストモダン」という言葉は一つの魔術の言葉として使われることもありますから、私たちが「ポストモダン」という言葉を日本研究について記述的な意味で使う場合は、これはすばらしいものかどうか、最終的な日本研究の姿ではないかというような考え方はしてはならないと思います。

日本研究はいま過渡期にありまして、これから量的にも質的にも変わる、そういう時代だと思います。

ここで国際日本文化研究センターに私たちのほうから何かお願いできるようなことがあるとしたら、いくつかの点が挙げられるのではないかと思います。

一つは人間の普遍的なところですね。日本研究はそれを探り出すのに役立つ一つの道具だと思うのです。それと同時に、日本の特殊なところを探り出す道具でもあるわけです。

二番目には、アジアにおける日本と世界の中の日本という研究。つまり構造的な研究ですね。どんな構造的な類似性があるか、違うところはどこにあるかということ。これは非常に必要なものではないかと思えます。

三番目には、コンタクト・シチュエーションですね。コンタクト・シチュエーションというのは構造的な類似性の研究とは非常に違う。つまり、実際のコンタクトの場面の中の行動を研究するということになります。

四番目は、日本研究の研究。これはこの会議で始まったテーマですが、実は始まっただけで、私たちはプロセスとしての日本研究についてはいまだところまったく知らないわけです。これをなんとか続けさせることがで

きるといいのではないかと思います。

クリステンセン さっきのセッションの自国と外国、あるいは専門と地域研究という対応の問題について、私は、連歌百韻という詩形を研究した上で学んだことを、この問題を解くために応用できるのではないかと思います。

何を学んだかといいますと、連歌においてはおのおのの句の意味内容自体よりも、句と句の関係のほうが大切であり、その関係づけの上でしか各句の存在意義があるということです。

このことを、私たちが国際的研究をこれからどういうふうにするかという問題に応用しますと、自国研究、外国研究、あるいは特殊性と普遍性は相互依存の関係にあり、普遍性がなければ特殊性も出ないだろうと思います。そしてまた、自国研究というのは、外国を意識しなくては出てこないのではないかと思います。ですから、さつき園田先生は、自国研究としての日本研究は自動的な結果としての日本研究であるとおっしゃいましたが、私も同感です。本当の自国研究の日本研究というのは、例えば日本文化はほかの文化より優秀であるという意識の上に立てば、それは本当の自国の日本研究であると思います。つまり政治的なこととかかわりがあるのではないかと思います。このシンポジウムでは私たちの研究は政治とどういうふうに関係するか、権力というものととの関係はどうであるか、そういう点についてはだれも述べなかつたのが残念です。

梅原 ありがとうございます。まだいろいろご意見があるかと思いますが、時間もなくなりました。この三日間の御協力に感謝するとともに、今後のご協力をお願いいたします。

この国際研究集会は、本センターの第一回の国際研究集会でございます。本来ならば、三年あるいは四年の共同研究の後に、その共同研究のテーマをめぐって行われるものでございます。しかしながら、当センターは昨年五月に設立したばかりで、共同研究は早いもので昨年開始されたのでございますが、ここ三年は共同研究の成果をもとにして国際研究集

会を行うわけにはいかなないので、三年間は、日本研究の方法論的問題の討論をおこなうことにしたいのです。それでは今年のシンポジウムはこれまでといたし、議論し残したものは来年の集会で深めたいと思います。では皆様どうも御苦勞さまでした。